

赤い羽根共同募金の
配分を受けて
発行しています

明日 への手紙

~To Youth From Youth~



2 ● 子どもだからこそできるんだ!
(フリー・ザ・チルドレン・ジャパン)

3 ● ボランティアって?
(ドナルド・マクドナルド・ハウス)

4 ● 障がい者スポーツデー
(公益財団法人新宿未来創造財団)

6 ● 荒川区立タヤけこやけ保育園

8 ● ユース記者座談会

高校1年生と3年生の6名のユース記者が作成した広報誌です。
タイトル「明日への手紙 ~To Youth From Youth~」は高校生の目線で、
同じ世代に届けたい気持ちを込めて名付けました。
明日へ踏み出すきっかけになればと思っています。



ユース記者キャラクター
ゆーすけくん

子どもだからこそできるんだ!

～フリー・ザ・チルドレン・ジャパン(FTCJ)～

フリー・ザ・チルドレン (FTC) は、1995年に当時12歳だったクレイグ少年によってカナダで設立された国際協力団体です。「Kids Can (子供だからこそできるんだ!)」を合言葉に、子どもによる国際協力活動を推進しています。私たちは、平成25年7月23日に開催された「地球愛祭り in 東京」に出展していたフリー・ザ・チルドレン・ジャパンスタッフの原元さんと、活動メンバーでフェアトレードチームの代表をされている高校2年生の関根峻人さんに取材をしました。

子ども主体で活動

原元さん

この活動にかかったのは、高校時代に来日した創立者のクレイグのスピーチを聞いたことがきっかけです。「自分もやってみたい」と感じました。自分と同じ世代のクレイグから言われたことが大きかったです。

関根さん

クレイグの本「僕たちは、自由だ!」を読んで、自分と同じ小中高生が活動していることを知り、中3の夏休みから参加しました。一番の魅力は、子どもが主体で活動を行えることです。

コラム① 「僕たちは、自由だ!」

この本には、12歳のクレイグ少年が働く子どもたちの現状を知るために、南アジア5カ国を50日間旅した様子が描かれています。児童労働やストリートチルドレンについて、彼らを支援する団体、解決に向けて子どもにできること、なども書かれています。私も読んでみましたが、クレイグ少年の行動力には本当に驚かされました。子どもだからこそできることがあるんだ、と思わせてくれる本です。

おすすめ!



ダンスチーム



FTCJ の子どもメンバーは、小中高校生合わせて500名ほど在籍しています。それぞれがさまざまなチームに分かれて、自分の好きなことで世界貢献できるのが大きな特徴です。今回の地球愛祭り in 東京では、児童労働の問題を知ってもらうため、ダンスチームがパフォーマンスを披露し、注目を集めていました。「児童労働という問題があるということを知って欲しい。そして、それを家族や友達に伝えて欲しい。1人でも多くの人がこの問題について知ることによって世界を変えることができる!」というメッセージは心に響くものでした。

フェアトレードチーム

フェアトレードとは、発展途上国の人々などが作った製品・工芸品を、長期的に適正な価格で取引することです。フェアトレード商品は先進国ではあたり前なのに、日本ではまだあまり知られていません。このチームはフィリピンの NGO 団体をパートナーとして、フェアトレード商品を日本で販売し、より多くの人に知ってもらうための活動を行っています。



コラム② 「児童労働」

日本では労働基準法によって、13歳から15歳未満の子どもに有害な労働を認めず、13歳未満の子どもは労働すること自体を基本的に禁止するなど、法による手厚い保護を受けています。しかし、世界に目を向けてみると、私たちと同年の子ども14人に対して1人の割合にあたる1億1530万人の子どもが、貧しさゆえに学校にも行けず、長時間食事や休憩も与えられないまま働かされ、体に有害な仕事をさせられています。

(参考にした統計: <http://ci-net.org/child-labour/data.html>)

関根さん・原元さんインタビュー

関根さん

1人ではない!!

1人で立ち上がってボランティアをする人は少ない。1人では難しいし勇気がいる。でも、決して1人ではない。1人1人の行動が世界を変える。恐がらずにボランティア活動に参加してみてください!!



原元さん

色んなことに興味を持って!!

高校時代に同じ世代のクレイグのスピーチを聞いたことが今の活動につながっています。メンバーは自分の好きなことで活動しています。色んなことに興味を持って参加してみてください。



ボランティアって？

～ドナルド・マクドナルド・ハウス～

皆さんもよく訪れるマクドナルド。そこで、このような募金箱を見たことはありませんか？他にもトレーの中に敷かれている紙や店内のポスターなどで、一度は「ドナルド・マクドナルド・ハウス」という名前を目にしたことがあるのではないのでしょうか。ドナルド・マクドナルド・ハウスとは、自宅から離れた場所にある病院に入院している子どもと、その家族が利用できる滞在施設です。公益財団法人ドナルド・マクドナルド・ハウス・チャリティーズ・ジャパンが運営しています。日本で第1号の「せたがやハウス」を訪れ、ハウスマネジャーの峯田洋一さんと利用者の方に取材をしました。



Home away from home ～利用者の方にインタビュー～

「せたがやハウスがなかったら、東京まで来られなかったかもしれない。ここがあるから、東京まで来て一番受けたい治療を受けることができた」と、ハウスを利用する森さんの言葉は印象的でした。一人でいられる時間も、他の人と交流することもできるハウスは、利用者の方にとって、ほっと落ち着ける場所のようです。「ここのような施設がもっと増えるといい」とおっしゃっていました。

落ち着ける空間を作っているのが、ボランティアの方々です。「Home away from home～第二の我が家」をコンセプトに手作りの手芸品などで明るい雰囲気をつくり出しています。



ハウスは寄付によって成り立っています。寄付されるものは、アメニティや食料品など多岐にわたっていて、寄贈本による図書館もありました。「日用品の寄付など、一般の方にも簡単にできる支援もある。しかし、いらぬものだから寄付をするのではなく、寄付される相手がほしいだろうと思えるものを寄付してほしい」という峯田さんの言葉は印象的でした。それぞれのハウスでは、寄付して欲しいものをまとめた「ウィッシュリスト」をHPで公開しています。

私たちにできるコト ～高校生へのメッセージ～

峯田さんから、私たち高校生に向けてのメッセージをいただきました。「ハウスのことを知ってもらえるように、学校で呼びかけたり、発表をしたりして、支援のきっかけを作ってほしい。正確な情報を伝えてもらうことで、支援者も増えると思う」。情報発信など、私たちだからこそできることをやっていきたいです！



みんなに伝えたいこと

ボランティアは自分を犠牲にしてやっている、という気持ちでやるものではないと感じました。2つの取材先では、どの方も、自分の得意な分野、好きなことなどでボランティアをしていました。とくに FTCJ では自分と同世代の人がたくさん活動しているのを見ることができました。みんな楽しそうで、自分がやりたいからやっているんだ、という気持ちが伝わってきて、輝いて見えました。

(美帆)

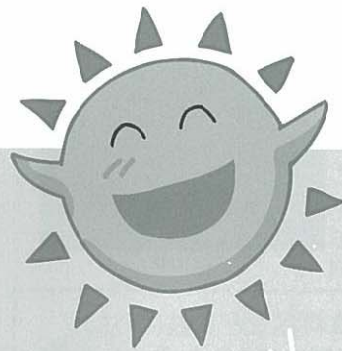
2つの取材を通じて、僕が最も感じたのは、同い年の高校生や中学生もさまざまな体験から刺激を受けて、隣人のために、そして世界のために何ができるのかを真剣に考えて活動している、ということです。そして、そうした刺激は意外と我々の身近にあります。本を読む、フェアトレードの商品を手にとってみるなどです。僕も、マクドナルドで見た募金箱に関心を持ったことが、今回の取材のきっかけでした。この記事を読んで皆さんも、身近なコトに関心を持って、立ち上がってほしいと思います！（弦）





「障がい者
スポーツデー」って？

さまざまな障害を持つ方やボランティア
が集まりスポーツを通して交流していま
す。新宿コズミックセンターでは、毎週
火・木曜日はプール、水曜日は体育館で
開催しています。水泳やショートテニ
ス、ボッチャなどもありますが、気軽に
参加できる卓球が人気です！



みんなの 憩いの場



参加者の方に
お聞きしました！

みんなで一緒にできる

「最初は卓球の球に追いつけなかったけど、だんだん手足が動かせるようになって、打てるようになった」など、技術の向上を実感できることが練習を続ける励みになっているようでした。また、「毎週1回、スポーツデーに参加すると生活のリズムが作れる」との意見もありました。卓球をしていて辛いことは「ない」と言い切るほど、みなさん仲良く、この集まりを大切に思っていることがわかりました。「みんなで一緒にできる」ということが、活動を続ける最大の魅力になっています。



またみんなで集まりたい!

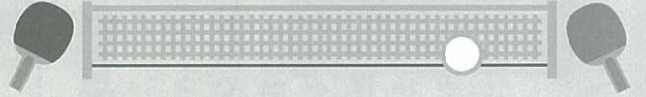
4、5年前に障害者スポーツセンターを卒業した方が、「またみんなと一緒に集まれる機会を作りたい」と思って、コスミックセンターの職員さんに働きかけたのがきっかけだそうです。今は10人程度が参加しています。



人と接することが好き

さまざまな障害を持つ方と卓球をすることで、「障害者も健常者と変わらない」と感じました。卓球が初心者で、下手な私を気づかって、優しい球を打ってくれたり、緊張している私に話しかけてくれました。そんな配慮に、安堵と感謝の気持ちに浸りながら球を打ったことを覚えていきます。障害を持っているということで偏見や関わりづらいついて壁を作ってしまうかもしれませんが、実際に関わってみると私たちと変わりなく、むしろ思いやりのある優しい方たちでした。人と接することが好きなのだと実感しました。

sports day



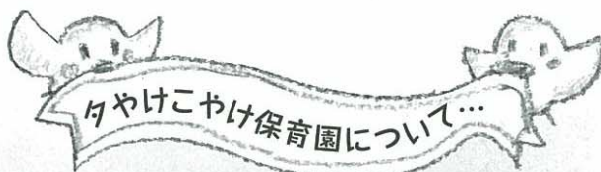
みんなに伝えたいこと

「障害者」と聞くと、話にくいというイメージをもつ方もいるのではないのでしょうか。私も、このイベントに参加するまではそんなイメージを抱いていました。ですが、実際にお話ししてみると、みなさんととても明るくて、フレンドリーでした。私たち高校生が障害者の方と一緒に何かをできるイベントは少ないのですが、機会があるときには参加し、一緒に活動することできっと何か得られることがあるはずです。(沙穂)

町や電車で障害者を見かける機会はあると思います。しかし、なかなか接する機会が少ないのが現状です。接する機会の少なさが障害者に対する差別や偏見につながり、理解が広がらないのだと思います。このイベントを通じて、障害者の方たちの温かさや優しさにつれ、もっと関わりたい!接したい!と思うようになりました。実際に接すると、これまで抱いていた感情と違う感情に変わるはずです。少し勇気がいりかもしれませんが、関わりを通して感じた「楽しさ」「温かさ」をもっとみんなにも感じてほしいと思います。(桜子)

夕やけこやけ 保育園

～多国籍の子どもたち～



多国籍の子どもがいる保育園って どんなところ？

私は子どもの頃、幼稚園に通っていたので、保育園に対してのイメージは「お昼寝・おやつ」の時間があつて「うらやましい」といった具合で、実際どのようなところなのかよく知りませんでした。そこで、保育園のことを詳しく知りたいと思いました。多国籍の子どもたちが過ごす保育園があると知り、どのようなどころなのか興味があつたので、「夕やけこやけ保育園」取材しました。



荒川区にある夕やけこやけ保育園は、日本のほかに中国、韓国、モンゴルなど外国にルーツのある0歳から5歳までの子どもたちが通っています。朝早くから夜まで1日の大半を過ごす子もいます。「親と長い時間会えず寂しくないのかな」と思っていました。子どもたちの笑顔を見ると、優しい保育士さんと一緒に安心して楽しく過ごせる場所だと感じました。幼稚園との大きな違いは、0歳や1歳の赤ちゃんとクラスがあることです。インタビューした際には、保育士さんは子どもたちから目を離さず、安全を常に確認していました。

保育士になるためには、国家資格の保育士免許が必要です。働く人の子どもの預かる、福祉の仕事なので厚生労働省が関わっています。また、幼稚園の先生になるためには幼稚園教諭の資格が必要で、これは文部科学省が関わっています。保育士、幼稚園教諭両方の資格を取る人が多いそうです。





言葉・文化の違い

.....

夕やけこやけ保育園に
いるときは「家庭での習慣
も大切にしながら、保育園
では日本語・日本の風習で
過ごす」という方針です。
これは、将来日本での生活
が嫌にならないよう、日本
の言葉・習慣を身につけて
欲しいからだそうです。ま
た、保育士さんが子ども
たちと言葉でコミュニケー
ションをとることが難しく
つたり、多国籍であるが故
の問題もあります。



小さい保育士さん

〜小学生ボランティア〜

.....

夕やけこやけ保育園では、夏休みに小学生の
ボランティアを受け入れています。ボランティア
活動について調べると、どれも年齢制限があり、
私たち高校生ですらできないことが多い中、小
学生が活動をしていると聞いて驚きました。
小学生になぜボランティアをしているのと尋ね
ると、「将来保育士になりたいから。子どもが好
きで楽しいから」と、インタビュウを受けなが
らも園児を気にしつつ教えてくれました。その姿は
小さいながらも立派な保育士さんでした。

保育士さんにインタビュウ

.....

いくつかのクラスを訪問し、保育士さんにイン
タビュウしました。クラスには食文化が異なる子
どもがいました。「何か困ることはあります
か?」と保育士さんに尋ねると「家では自分の国
の文化であぐらや、手を使って食べている子ども
がいます。保育園ではな
ぜ椅子に座り箸を使わ
なければいけないのか疑
問を感じる子もいま
す。子どもにその意味
を教えることが難しい」
と、園児から目を離さ
ず教えてくれました。



みんなに

伝えたいこと

.....

私は取材を通して、自分が保
園を全然知らなかったことに改め
て気づかされました。また、夕やけ
こやけ保育園で過ごした子どもた
ちは、様々な文化があることを幼い
うちから知ることが出来ます。これ
から生きていく社会で、国境の壁を
なくしていく先駆者になってくれる
のではないかと感じました。多国籍
の子どもと一緒に生活している保
園があることを知り、言葉・文化の
違いを乗り越えることの大切さを
伝えたいと思いました。(優里)

私はボランティアについて「少し
固く、多少の厄介なことを人のた
めにすること」と考えていました。
取材を通して、自分の好きなこと
を活かして人のため、更に自分のた
めにもなるということが分かりま
した。今回の『小さい保育士さん』
のように自分の経験を積める『ボラ
ンティア』について、自分の考えを改
める良い機会になりました。
(りお)



座談会



ユース記者に参加したきっかけは？

沙穂 学校の掲示板に貼ってあった。前から文章を書くことが好きだったので参加した。いろいろな学校の生徒と話せるのも魅力的だった。

桜子 障害のある方のボランティアを10年間続けていて、「偏見」をなくして理解の輪を広げたくて、参加した。

美帆 図書館司書の先生から勧められて、視野を広げるために参加した。

弦 学校の先生から紹介されて、同世代に福祉の問題を伝えたいと思った。

優里 中学校で福祉を学んで、具体的にどのようなことなのか興味を持った。取材をして、色んな人と接したいと思った。

りお 中学生のころ、高齢者施設で職場体験をして福祉に興味を持った。文章を書くのが好きで、他の人にも福祉のことを伝えたいと思い参加した。

取材で印象に残っていることは？

弦 FICJの関根さんが話した「高校生が1人でボランティアするのは難しいけど、1人が行動することで世界が変わる。怖がらずにやってみて欲しい」という言葉が印象に残った。同世代には「児童労働」の問題も知ってほしい。

美帆 自分と同じ世代なのに、いろいろな経験をしていてすごいなと思った。取材のあとに創設者クレイグの本「僕

たちは、自由だ！」を読んで、子どもでもできるんだと思った。

弦 ドナルド・マクドナルド・ハウスはボランティアが確保できつつ、他の利用者やスタッフとコミュニケーションがとれる環境だった。そのようなしくみになっているのがいなと思った。

美帆 ハウスの利用を希望する人はたくさんいて、利用できる順番は家との距離など「負担の重さ」で判断していた。負担の重さは本人じゃないと分からないから難しいなと思った。

優里 タヤけこやけ保育園は、大きくてきれいで、保育士さんはインタビュの時も、子どもから目を離していなかった。言葉とか文化が違うと大変な面があるけど、それでも子どもがすごく好きという気持ちが大事だと思った。

りお 小学生ボランティアがいて、小さい園児の面倒を見ることで、小学生自身が成長することができ、そのような環境を作ろうと考えた園の方針もすごいと思った。

桜子 「障がい者スポーツデー」では障害がある方が、卓球やボッチャなどを楽しんでいた。スポーツを楽しくしていると同時に、他の人と話したり「ミニセッション」を楽しむために来ているのかなと思った。センターの方はいまお手伝いはせず、障害のある方が自立してできるところがいなと思った。

沙穂 卓球をあまりやった経験がなかったから、障害がある方と一緒に楽しめるかどうか不安だった。実際に体験してみると、みなさんとても上手で、下手な私にとても分かりやすくラケットの握り方や打ち方などを

1から教えてくれた。相手に障害があるとか、そういうことは関係なくただ純粋に卓球を楽しむことができた。

美帆 ボランティアは強要されてではなく、やりたくてやるもの。楽しそうにやっていると、やりたいからやっているというのが伝わってきた。

りお ボランティアは人にする、つくすことだけではなく、小学生ボランティアのように自分自身が得られるものもあって、自分のためにもなるということを知った。

弦 ボランティアは、気持ちの持ち方が大切。やりたいからやるのがいいんだけど、「やってあげている感」が出ちゃうこともあって難しい。

優里 ボランティアが、「やってあげたい」と感じて行っていれば、「やってあげている感」は自然と出ないのではないかな。

弦 「やってあげている感」というのが受け手が「やってもらっている感」を感じてしまうのがいけないのかな。迷惑かけていると感じてしまったり。

美帆 「やってもらっている感」を感じても、こういう風にやってもらっているから、いつか自分も恩返ししたいというように、ごんごん繋がるのはいいことじゃないかな。

このように誰かに何かをしてもらった経験はありますか？

気持ちがあった。そして「もっと勉強してこれに報いよう」と思った。

弦 学校でいろんな活動に手を出して細かいことまでできていなかったときに、手伝ってくれた人がいた。その人も忙しかったのに。

優里 学校のグループ発表で、代表で1人が発表しなければならぬ時みんなシーンとしていたが、「やるよ」という声くれた子がいた。

ユース記者活動を感じたことは？

弦 いろんなことを知るチャンスは身近にあると知った。自分の身近なところにもっと注意を払って、チャンスを見逃さず活動していきたい。「介護のコト体験フェア」(*)で話した介護のプロは、小中学生のころに自分の仕事を決める出来事があったと言っていた。いま経験したことは、その後の人生に影響があると思う。もっといろんなことに挑戦してみたい。

美帆 取材では、自分と同じ世代の人が世界に目を向けて行動していた。高校に通っている「閉じた世界」。「開けた世界」を感じられた。

沙穂 福祉について、自分とは遠い世界のことだと感じていた。でも、意外と身近にあった。普通に高校に通っている福祉と出会うきっかけはあまりない。ユース記者できっかけをもらえた。

優里 保育園を取材してみても、意外とフクシフクシしてないんだと知った。これからはもっと知りたいし、いろんなことに挑戦してみたい。

閉じた世界から一歩踏み出す (タイトルを考える際に候補に挙がった言葉です)

平成25年度ユース記者 (あいうえお順)

- ・織田 美帆 (豊島岡女子学園高等学校1年)
- ・児島 桜子 (学習院女子高等学校3年)
- ・土屋 弦 (明治大学付属明治高等学校3年)
- ・中村 りお (順天高等学校1年)
- ・林 紗穂 (鴎友学園女子高等学校1年)
- ・藤岡 優里 (鴎友学園女子高等学校1年)

[スタッフ]

吉原淳二、森直美、土屋ゆかり (東社協)

特別号の内容は本会ホームページ「ユースのページ」にも掲載しています。
http://www.tcsv.tvac.or.jp/youth/index.html

(*)介護のコト体験フェアは、介護・福祉に関心を持ってもらうために、本会が平成25年11月17日に開催したものです。内容は「ユースのページ」をご覧ください。

福祉広報 特別号

明日への手紙 ~To Youth From Youth~

発行人=小林秀樹
社会福祉法人 東京都社会福祉協議会
東京都新宿区神楽河岸1-1
☎ 03-3268-7171

http://www.tcsv.tvac.or.jp/

ご意見
お待ちしております!

特別号について